
GS恋姫無双

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GS恋姫無双

【Nコード】

N8498Z

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

恋姫の新しい外史へ、よこっちがあられました。・・・ただし、もうひとり追加です。いや、一柱ですねw 乙女な三国志に紛れ込んだ彼らの活躍にご期待ください。>鉄板展開でよこっちがロリへの道に招かれています。いつ落ちるのか!?!「おちねーよ!!--」

第一話（前書き）

えー、ありがちな作品を書き続けた神代印のよこっちもの新作です。

できてる分は一気にいきますんで、よろしくw

第一話

見渡す限りの荒野。

というか、全然見渡す限り何も無い。

山とか遠くにあるけど、方向とか方位とかそういうものを見つけないのは全く役に立つ感じが無い。

「老師、これはどういうことですか？」

「むー、やっちまったかのお？」

青年というには若い、紅いバンダナの男と、まるでサルのようないや、猿そのものの眼鏡をかけた老人が呆然と立っていた。

「老師、もう一度聞きますが・・・」

「なに、たぶん事故じゃな」

取り合えず、事故、という老人。

「それって、どういう類の事故ですか？」

「ふむ、転送事故じゃな」

ふう、と溜息を付いた後、男は輝く珠をかざして周囲を見回す。しばらくくるくる回った後で、男は老人を見た。

「まずいつすよ、まずいつすよ、まじで全く不明な場所じゃないっすか！」

「ふむ、長い人生じゃ。こういうこともあるじゃろ」

「あんたの超ロング人生と一緒にすんなや!!」

男の叫びは荒野を走る。

しかし誰も答えてくれない。

聞こえているはずの老人は馬耳東風。

取り合えず前を向かなくちゃ、と涙目の男であった。

妙神山での合宿が最盛期を迎えた所で、老師が面白いものを開発したので一緒に遊ぼうといい始めた。

体験型のRPGだということで、戦略や戦闘の経験稼ぎの足しになるはずだという話だった。

面白いかもしいないが、試すにや恐いかナーとかおもっていたんだけど、まあ時間もあるし、ということでテストプレイを試してみた。

してみたんだけど、なんつうか、こう、いきなりバグがあった。

展開されたのは仮想空間じゃなくて、転移陣だった。

瞬間発動したため、俺も老師も巻き込まれて荒野に飛ばされた。

飛ばされた当初は呆然としてただけど、腹は減るし睡眠も必要ということで早々に移動することにした。

半日ほどして到着したのが今暮らしている村で、相次ぐ盗賊の襲撃で男手が不足しているそうで、住み込みで農作業を手伝う代わりに食事を提供してもらっている。

「兄ちゃんと同じいちゃんが来てくれて助かってるよ!」

「兄様、御爺様、存分に召し上がってください」

幼い少女の姉妹かと思いきや、親友同士の典韋こと流琉と許緒こと季衣の二人。

二人とも力は強いのだが農作業には向かないらしい。多分、気による強化をしているんだろうなあ。

「わしらこそ助かったぞ？ 流琉、季衣」

「ああ、ワイらを助けてくれたのは二人や。困ったことがあったら相談してや」

うんと頷く少女二人。

良い笑顔や。

二人の少女と共に二月ふたつきほど生活していた所で、近くの廃砦こぼに破落戸つぎが集まっているという噂うわさが流れてきた。

流琉、季衣の二人が偵察してきた所では、黄色い布を頭に巻いた男達おとこが下品な笑い声を上げて、この村の襲撃をたくらんでいたというのだ。

「ふむ、役人に訴えてみるかの？」

「じいちゃん、そりや無駄だよ。あいつらにそんなこと教えたら、自分のも他人のも関係なく財産かき集めて逃げられちゃうのがオチだよ」

「そんなに頼りないんか？」

「というか、頼った計画をするだけ無駄です」

辛らつな二人の少女の言葉だったけど、真実なんだろうなあ、と思う。

「じゃ、もっと偉いやつは？」

「もっと早く逃げる」

なんつつか、共感出来そうな行動方針やなあ、と俺。

「ふむ、で、流琉、季衣。下郎は何人ほどじゃ？」

「んー、二十人ぐらい？」

「中で炊事している煙も上がってましたのでその倍以上はいると思います」

「なるほどのお・・・」

ぼんぼんと棍で肩を叩く老師を見て、全力でいやな予感がした。

「その程度なら、わしと横島で十分じゃな」

「「え!？」」

思わず目を見張る流琉と季衣。

「たしかにじいちゃんは無茶苦茶強そうだけど、兄ちゃんは・・・」

「何を言う。横島はわしの持った弟子の中で一番の弟子じゃぞ？」

「・・・へえ、じゃあ、にいちゃん、手合わせしてくれろっ!？」

「ことわる!」

何が悲しゅうて、将来有望な美少女と戦にゃならんのだ。

美女美少女の味方、それがわいぢや。

「・・・にいちゃん・・・」

な、泣くな泣くな泣くな！
解ったから泣くな~~~~~

「やった~~~~~！」

あかん、泣いとらんかった。
やられた。

第一話（後書き）

よこっちは、なぜかロリに引っかかる。

これはよこっちものの宿命か？w

第二話

御爺様の言葉は伊達じゃなかった。

季衣の鉄球がカスリもしない。

その上、

「あかん、引き戻しに時間を掛けすぎや」

「同じところにおったら、囲まれるで」

「よしや、その動きや」

「あかんあかん、その場所はだめや」

優しく教えるように季衣の戦い方を正してゆく。

最初はイライラしていた季衣も、いまでは遊んでもらっている子犬のように目を輝かせて兄様に鉄球を向けている。

やってることは殺伐としてるんだけど、局部的には何とも。

はあ、これじゃあ付いていくって計画が丸つぶれ。

「どうじゃ、横島の実力が低いなら、警護目的で着いてく計画が丸つぶれじゃろ？」

「御爺様、ご存知でしたか？」

「まあな。これでも年だけは重ねておるからのお」

軽く笑う御爺様。

孫赤空そん・せきくうという名のお爺様は、真名を「悟空」とおっしゃいます。まるで神仙のようですねというところ、面白そうにお笑いになられま

す。
「ですが、二人だけというのは・・・」
「実はのお、わしの「武」は酷くての。そなたらに嫌われたくないのじゃよ」

優しげな二人の「武」は、人前で使うと嫌悪感をもたれるから見せたくないとおっしゃる御爺様。

でも、私たちは知っている。
お二人がどれだけ優しく、どれだけすばらしい人たちかを。

折角俺が季衣に勝ったのに、老師が流琉に負けた。
そんなわけで、仕方なく破落戸退治にことうすると、村の有志も立ち上がる。

まいった、この村の連中は気持ち良いから、ことういう展開になると思つてたんだよなあ。

でも、みんなの意志も固いので、仕方なく、本当に仕方なく集団を組んで攻め込むことにした。

つつかさ、老師一人いりや、話がすむんだがなあ。

「そうなんですか？ 兄様」

「ああ、老師が本気になれば、勝てる人間なんかおらんぞ？」

「ふわあ、じゃあ、兄ちゃんより強いのか？」

「せやせや。俺が百人いてもかなわんな」
「へえ……」

未だ武力が格好良い世界の少女たちなので、その強さへの憧憬は絶えることがない。

季衣は俺にかなわなかったことで一気に評価を上方修正したし、その師匠である老師には更なる上方修正評価をしていた。

で、そんな強い人たちが率いているのだから、と言うことで村人の士気も高い。

なんつうか、本気で時代物のゲームを体感してる気になってきた。信長の野望とか、円卓の騎士団とか、三国志とか……。

「……ん、三国志？」

「どしたの、兄ちゃん」

「いやいや、なんでもない」

……やべ、急に色々繋がったぞ。

黄色い布の破落戸>黄巾

季衣>許緒>曹操の武将

流琉>典韋>同じく

……まさかなあ……。

妙神山でやっていたシュミレーションゲームを思い出してしまった。

パピには不評だったけど、小竜姫様と戦略を練りながら遊ぶのは結構おもしろかったのを覚えている。

そう、イヤなぐらいに覚えてる。

「まさかなあ・・・」

「横島、声を出すな。そろそろつくぞ」

その声を聞き、周辺も声を止めた。

目指す砦が視界に収まったから。

それは流れるような体術だった。

兄ちゃんと同じいちゃんが先頭になって、砦に攻め込んだんだけど、すぐに門が閉められた。

閉められたのにじいちゃんが棍を叩きつけると、門が吹っ飛んだ。

「・・・」

誰もが、村人も破落戸もみんな呆然としている。

そんななか、兄ちゃんが武器も持たず躍り出て、そこら中の破落戸を殴りとばして気絶させていった。

「よし、気絶した奴ら方縛り上げてくれ」

「・・・わ、わかった！」「」「」

にいちゃんといい、じいちゃんといい、どんだけの修行したらあんな「武」を修められるんだろう？

でも、にいちゃんやじいちゃんに習っていれば、いつかたどり着くかな？

「横島！ やれ！！」

「うっす！」

じいちゃんのかげ声と共に兄ちゃんが砦の壁を飛び上がって越えた。

つつか、兄ちゃん、何者？

ドカンとかバキとかカキンとかいろんな音はしたけれど、血の臭いは一切しない乱闘音の後、にこやかに手を振って兄ちゃんが出てきた。

「つっわけで、中には50人ほどいるから。全員縛り上げよう」

「「「「「おおおおお！」「」「」「」

まるで幻みたいな二人の活躍で、黄色い奴らは全員取り押さえられた。

「……やっぱ兄ちゃん、すごい！」

第三話

なんつうか、皆から戻ると季衣がまるで猫のようにすり寄ってくる。

「一言目には「手合わせしようよ」と潤んだ瞳で見てくるんだ。

・・・くそあ、わいはロリやないんや。

揺るがんぞあ。

とはいえ、こう、甘い香りを出してすり寄ってこられると、どうも、なんつうか、やばい。

この村には辛抱たまらん美女が居ないだけに、この誘いには参ってる。

「横島、10や20の年齢差など、大したことないぞ？」

「だから、あなたの超々長い人生の視点で見るなや！」

あぶねえんだってばよ、ほんとに！！

付け加えるなら流琉もやばい。

こう、なんつうか、視線とか態度とかが危険な気がする。

そう、黒くなる前のおキ又ちゃんみたいなかんじで。

つまり、「シメサバ丸」一歩手前つうことが。

やばいやばい。

冷や汗いっぱいの俺たちの生活は、再び脅かされることになったのだが、破落戸の襲撃に感謝することになるとは思わなかった。

聞けば、化け物みたいな奴らが居るといふ。

一人はまるで猿のような老人だが、武は化け物。

もう一人は見た目はふつうだが、動きが化け物。

そんな二人の化け物に守られた村があるというのだ。

その村人に襲撃された集団は全員捕まったのだが、賄賂一つで釈放された。

この世の中は、実に俺たち向きだ。

「か、かしら、やっぱりやめましょうや」

「そうでさあ、あそこには化け物二匹がいるんでさあ……」

「も、も、もう、会いたくないんだな」

解放された奴ら全員がビビっていた。

というか故郷に帰って重税でも農民やってたほうがよかったと本気で青くなっている。

「てめーら、『しすたーず』に会えなかった方がいってのなあ！
？」

瞬間、ビビってた奴らの氣勢が上がったが、それは一瞬で、すぐに低下してしまった。

いかに恐ろしい目にあつたのやら、と悩んでしまう。

一応、本隊へ戻して「しすたーず」を一度見た方がいいかもしれない。

そんな判断をしているところで、正面の村から砂塵をあげる存在が現れた。

「だれか！」

「はっ！」

「あれはなにか!？」

遠見役が声を上げる前に、一部が声を上げた。

「ば、化け物だ・・・」

「なに？」

振り向けば、何人もの同士が真っ青になつて逃げ支度をしていた。

「かしら、正直に言います。生き残りたかつたら、あいつら化け物に正面から向き合わず逃げることを提案するっす!!」

提案が通らなくても逃げる、どこまでも逃げる、故郷まで逃げる、飢饉でも逃げる、全力疾走で夜も徹して逃げる!!

そんな叫びをあげて逃げた男の後を、数十人が追つた。

その姿を唾然と見ていた男たちは、苦笑いで向き直つた。

現れたのは二人。

百人からの攻撃で囲い込めば、どんな将だつて歩兵に殺されると

いつものだ。

そして俺たちは千人。
負ける道理がない。

「たった二人だ、押しつぶせ！」

「「「「「おおおお！！！！」」」」」

槍や剣を構えた男たちが砂塵に向かって踊りかかり……

……なぜか宙に吹っ飛んでゆくのが見えた。

「……え？」

俺を口り地獄から救ってくれた破落戸に感謝を込めて踊りかかる。
右手は霊波刀、左手にはサイキックソーサー。

相手の剣を槍を受け止めている間に、老師がふつとばすという連携で、すでに百人単位を空の星へと変えていた。

さすがに即死レベルの攻撃をすると後始末が大変なので、とりあえず死ななくて怖くて二度と逆らう気にならない程度に痛めつけることを重点にしてたら、半分ぐらいのところまで逃走開始。

もちろん追撃戦を実行して、さらにその半分を散らした。

「いやー老師、すごいっすね、奇跡っすよ」

「そうじゃろ？ わしも驚いてる」

「なにせ誰一人死んで（ない）（おらん）」

黄巾の戦闘集団を四散させた男たちは、旅に出ようと決意したのだった。

「（破落戸退治も結構おもしろいからのお）」

「（わいはロリやない、ロリやない・・・）」

決意の中身は結構差があったらしい。

そんな決意をする二人を、そのまま行かせるほどこの世界の神も甘くなかった。

「にいちゃんとじいちゃんについてく！」

「私も兄様と御爺様についていきます！！」

数日にわたる交渉の末、折れたのは男二人。
こうして四人は世直しの旅にでることになったのだった。

武神と噂される老人が引き連れる、一騎当千の武力を誇る者たちの噂は勢い良く広がるのだった。

第四話

とある村に立ち寄ったときのこと。

横島は一人の少女が迷子になっていることに気づいた。

「・・・おかあさん」

大声で泣きたいのを我慢しているのがありありとわかる姿に感動した横島は、同じ視線になるまでしゃがんでみせる。

「どないしたんや？ 迷子か？」

こぼれそうになる涙を我慢して、少女は小さくうなづいた。

「よっしゃ、いっしょにさがそ、な？」

驚いたように目を見開いた少女は、うれしそうにほほえんだ。

「おにいちゃん、ありがとう」

そんな少女を肩車した横島は、ゆっくりと周囲を見回した。

「おじょうちゃん、お母さんってどんなかんじ？」

「えっとねえ、うんとねえ、おっぱいがおおきいの！」

「・・・そりゃ、いいことやな」

思わず球体に近い体型の女性を思い浮かべた横島だった。
なにしろ、この時代で丸まると太れると言うことは裕福と言っ
とだから。

「じゃ、ゆっくりとここで待ってるか？」

「うん！」

少女が寂しくないようにと、横島は覚えている童話を聞かせたり、
歌を歌ったりしていたところ、いつの間にか周囲に人垣ができてい
た。

そんな人垣の向こうで誰かを呼ぶ女性の声。

「あ、おかあさんだ！」

「お、こつちからもよんだらええ」

「うん！」

にこやかな笑みのまま、少女は「おかーさん！」と両手を振っ
て女性を呼ぶ。

すると割れた人垣から特徴的な女性があれた。

確かに乳がでかい。

そして髪の毛が長く、腰がくびれてる。

で、かなりの美人！！！！

くそお・・・今、今、少女を肩車していなければ・・・

思わず流れそうになる血の涙をこらえつつ、苦笑いで横島は肩車
していた少女を女性に渡した。

「も、もう、散々さがしたんだから！」
「ごめんね、おかあさん……」

親子が抱き合う姿を見て、いいものみたわーと言う感じで人垣が崩れていった。

巨乳・美人という頂点存在なのに何故飛びつかない、横島、という疑問もあるだろうが、色々と満たされて横島も成長したのだ。主に、出会ってすぐのセクハラが「ちょっと」人間関係に悪いことを、少しだけ学んだのだ。

というか、自分の父親のセクハラをみて成長したともいえる。

子供とは、親の背中をみて成長するものなのだ。

「娘が大変お世話になったみたいで、ありがとうございます」
「いやいや、こんな美少女が泣いてるんや。美女美少女の味方を自称してるわいが助けられないわけがない」

胸を張る横島をみて、女性は実に清々しいものをみる視線でみていた。

もちろん、超誤解である。

娘を助けてもらった補正でそう見えているだけだったが、この第一印象は様々な可能性を生んだ。

「……あの、よろしければ、お礼にお食事を御もてなしさせていただきますだけませんか？」

「……ええですか？ じつは大食いの連れもおるんですが……」
「結構ですよ。少なくとも、大食いの一人や二人に食いつぶされるほどの柔な倉は持っておりませんから」

女性の言葉にも、男の言葉にも嘘はなかった。

ただ、お互いの認識に差があったただけだった。

黄忠、真名：紫苑は、驚きで声をなくしていた。

彼、横島忠夫の連れである怪老人、というか喋る猿風味の老人に加えて、少女と言っていていい女の子二人。

そのうち一人が、食べる食べる食べる。

もう、大の大男が見ているだけで満腹になった、といわしめ、城の厨师たちが調理しすぎて倒れるほど食べるのだ。

その量は、500人前に相当する。

あまりの光景に声がでないのは当たり前だが、娘、璃々は横島さんになついているおかげか、「すごいねえ、おいしそうにたべるねえ」と感心しているだけだった。

「黄忠さん、いわれるままに食いつくしてすみません」

「・・・はっ、いえいえ、いいんですよ？ 璃々のことをかんがえれば、この、この、このくらいは・・・」

どうにか言葉を絞り出したが、相手のは悟らせてしまったようだった。

「すみません」

「・・・おほほほ」

まあ、それでも「腹八分目」でやめてくれた許緒ちゃんのおかげで、一月分の糧食を失うだけですんだのが暁光だっただろうか？
とはいえ、こんな大食い抱えて、どんな旅をしているんだろう、と首を傾げた黄忠。

「ああ、なんつうか、武術修行と世直し旅って感じで」

横島の言葉に、不意に思い出した言葉があった。

猿がごとき毛深い老人と、三人の弟子。

武神がごとくに猛々しい老人、変幻自在の風のごとき青年、そして一騎当千の少女二人。

それは噂の人間たちにぴったりだった。

「もしや・・・」

そう思い、噂を引き合いに出すと、四人は「ああ、たぶん自分たちだ」と認めた。

だから、黄忠は反射的に誘った。

「我が城で働きませんか？」と。

第五話

まあ、何つつか、結構おもしろい。

老師のゲームの暴走で始まった古代中国っぽい世界生活は、季衣と流琉という仲間と共に旅の空に移り、そして紫苑さんという領主の元で武官+文官というまことに怪しい仕事をするようになった。つつか、俺でもがんばってどうにかなる仕事って動なのよ、と思わなくない。

「助かるわあ、忠夫君達がきてくれてえ」

季衣や流琉は、結構兵に指示することになれていた。

これは村での戦闘訓練の影響だと思う。

加えて老師が個別に武術を教えているものだから、なんつつか、反則的に強くなってきている。

一般兵の中からも隊長クラスの实力者が結構現れていて、それを俺の部下にして指導しろという話がきたぐらいだ。

「で、この娘たちが、それっすか？」

白髪・真面目系、凧。

巨乳・技術系、真桜。

めがね・ファッション系、沙和。

・・・楽進、李典、于禁、のサンバガラスでした。
とりあえず、凧を小隊長、沙和・真桜を副長にしようとしたら、
俺を隊長にする体制でお願いしますということになった。

まあ、いいけど。

ともあれ、この三人を、将にするってのが紫苑さんから預けられ
た仕事って事らしい。

・・・つうか、いま、町の安全計画も丸投げされてね？
インフラとか、商工組合との折衝とか・・・。

だー、みんなまとめちゃえ！！

忠夫のやけっぱちは、結構当たった。
新人教育を三人に任せつつ、訓練の合間に町の巡回をさせて治安
活動。

加えて民からの相談や問題を吸い上げる相談員の代わりにしたり、
町のごろつきを検挙したりと大活躍だった。

もちろん、町の警備をしている奴ら全員が新人ではなく、まとめ
役の古参兵がいる構造にしている。

実に理にかなった手法だが、大本になる三部隊の扱いがおもしろい。

まず、楽進が纏めている楽進隊。

これは教科書通りの対応が得意で、動きも機敏だ。このまま軍に入れても問題ない奴らばかりだといえる。

次に李典隊。

李典の影響か、工作や製造にかなり向いている。

いわゆる工兵というやつだろう。

そして、于禁隊。

これが、なんとというか恐ろしい仕上がりだ。

いわゆる海兵隊式の洗脳教育で、命令なら何でも聞く状態にされている。

やばいモノでも、即死級でも盲目に従うマッシーンといえるだろう。

なんつう事を、と思ったが、どうやらその先があり、命令と共に何かを受け取れるようにする訓練の途中だという。

とまあ、実におもしろすぎる。

わしも一時、洗脳じゃと思ったからな。

とはいえ、この新人教育が功をそうしてか、周辺の治安は実によくなっておる。

もちろん、それを勘違いしてやってくる山賊の手合いも居ないわけではないが、それっぽい根城にきたところで戦滅しするので、結構気軽に対応できとるな。

「あの根城って、悪党ホイホイってかんじっすね、老師」

「言い得手妙じゃな」

「ホイホイってなに？ にいちゃん」

「んー？ いやなあ、置いとくと、ホイホイ入ってくなあって」

「ああ、確かにそんな感じですねえ」

とまあ、血塗れの武器を片手に話しているんじゃないから、いささか血なまぐさい世界じゃよ。

まあ、とりあえずじゃ・・・

「その小川で兵達を休ませてから戻るとするかの？」

「「「りようかい」「」」」

戦果を誇るのもいいのじゃが、さすがに返り血で血塗れの兵が町の中を闊歩するのはどうかと思うしのお。

「じいちゃんは璃々に嫌われたくないからねえ？」

「ふふふ、季衣、正直すぎよ？」

まあ、あのお嬢ちゃんに見せられる姿ではないと思ったことは事実じゃがな。

「・・・じゃあ、野郎どもは野営の準備、周囲警戒もワケろ。おなご衆は仮設浴場設置、忠夫に覗かれんように気をつけるんじゃないぞ」

「「「「はい」「」」」」

「「「「さーいえっさー！」「」」」」

「なんでワイだけやねん！！」

まあ、ほれ、うちの隊員は覗かんしのお。

第六話

旅の空で大騒ぎも楽しかったけど、お爺さまや兄様、季衣と一緒に暮らしながら腰を落ち着ける生活も良いと感じてる。

まるで本当の家族みたいで嬉しい。

兄様は武術に優れているけど、料理も結構手広い。

蓬萊や大奉の料理なんかの異国料理をご存じだ。

今日作ってくれたのも挽き肉という処理をされた肉を使ったもので、安い肉でも美味しく食べられる工夫がされていた。

季衣なんか目を輝かせて、おいしいおいしいと繰り返す。

なんか嫉妬してしまうほどだった。

でも、確かに美味しいし、大好きな一が作ってくれた料理を楽しめるといっても嬉しい。

たぶん、季衣が私に料理を作ってほしがってるのってこういう気分なんだろうなあ、と思う。

「どや、今日の丼モノは？」

「おいしいです、兄様」

「にいちゃん、おいしいよ！ おかわり！！」

「おにいちゃん、璃々もおかわりい」

「あらあら、璃々も好き嫌いなくなっただわねえ」

紫苑様も璃々ちゃんも、みんな併せて家族みたい。

「隊長、自分にもおかわりを！！」

「隊長、うちにも!!」

「隊長、美味しすぎて太らせる気なお!?」

・・・なんか、最近、家族増えすぎかも。

「鈴々もおかわりなのだぁ!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

だれ？

「ん？ ああ、巡回中に拾った」

「拾われたのだ!!」

「兄様、簡単に生き物を拾ってはだめです!!」

「せやけどなあ、おなか減って死にそうやって聞いたら、世話したくなるやろ?」

「ぐっ、確かにそうですが・・・」

流琉は何となく不満そうに、拾ってきた女の子を見ている。

季衣ぐらいの女の子で、おなかが減って動けなくなっているというのを助けたんだけど、なんつつか、食べたなら元気になった。

「お兄ちゃん、ありがとうなのだ!！」

というか、元気いっぱいになった。

食事も終わり、落ち着いたところで少女の自己紹介。

「鈴々は、張 飛 翼徳なのだ」

「わいは、横島忠夫や」

周囲の人間と名前を交わしたところで、何で倒れていたかという話になったところ……。

「鈴々は、愛紗たちと一緒に義勇軍をあつめようとしてたのだ!！」

で、この村、というか町の担当が張飛だという。かなり無謀な関係だな。

「で、一緒に人たちって、名前は？」

「愛紗と桃香ねえちゃんなのだ!」

「それ、真名やろ？」

「あ、しまったのだ……」

おもわず顔をしかめる少女張飛は、己の連れの名前を挙げた。

「愛紗は、関 羽 雲長。桃香姉ちゃんは劉 備 玄德なのだ」

俺と老師は内心汗だくだった。
うつわー、という感じ。
もう逃げようがない、そんな感じだった。

「んじゃさ、張飛ちゃん。二人も呼んだら？」

「・・・いいのか？」

「たぶん、ぜんぜん集まってるないんだろ？」

「・・・たぶん、無理なのだ」

お金もない、武器もない。

そんな状況で思いだけでは立ち上がれない、と張飛は結構現実的だった。

でも、いま、この思いを無にはしたくないと、そんな熱すぎる暴走姉妹だったわけだ。

「だからさ、紫苑さんのところで、軍の運用とか規則を学んでさ、その代わりに城で働いて恩返しして、世の中の動きや政治の動きを学んだらどうか？」

ね？ と紫苑さんに視線を送ると、しょうがないわね、と苦笑いでうなずいた。

どうだ、と張飛をみると、すぐうれしそうにうなずいていた。

「ほんじゃ、わいが説得に行ってくるわ」

「にいちゃんいつてらっしゃーい」

「隊長、今日の当番は・・・」

「真桜、昨日かわってやっただろ？」

「・・・了解や」

第七話

私と鈴々、そして姉上が義勇軍を立ち上げること志して一月がたとうとしていたが、いまだ同士と出会えないでいた。

姉上も鈴々も心が折れかかっていた。

そこで、二人の心の圧迫を休めようと、三人各々で募集を仕立ててみたが、やはり思わしくない。

二日目にして私の心も折れかかり、姉上のもとにきてしまった。瞬間、私は恥いることになる。

心が折れかかっていたと思っていた姉上は、普段の発言など想わせぬほど誠実に義勇軍の募集をしていた。

賢明な姉上の隣にたち、私もともに募集をしたが、やはり手応えがなかった。

「今日もだめだったね・・・」

「はい、ですが・・・」

「うん、あきらめないよ」

姉妹の絆だけは高まった。

四日目、不意に鈴々が現れた。

一人の青年を連れているところから勧誘成功かと思いきや、町で倒れていた鈴々を助けたという人だった。

心の底から感謝をしたが、彼は私たちの行いが上滑りしている事

実を指摘した。

反論はある。

しかし、それは事実だった。

「なあ、お二人さん。お二人さんは義勇軍で人を集めて、何人食わせられる?」

・・・!

考えもしなかった切り口に声がでない。

「たとえばな、この町の人たちを全員勧誘できたら、一日あたり何人分の糧食が必要だ?」

判らなかつた。

「各人の武器は? 防具は? 寝床は?」

全く判らなかつた。

「まあ、そういうことつつつのは、私塾じゃ教えてくれん。でもな、軍を立ち上げるなら知らんといかんとおもわんか?」

私と姉上は、なんの抵抗もなくうなずくしかなかった。

「てなわけで、提案や」

優しく鈴々を青年がなで、鈴々も気持ちよさそうに受け入れていた。

「張飛ちゃんの話聞いてな、うちの城主が、世直しの勉強のために客将でもええから士官せんか、っていつてるんや」

なぜか姉上が、なでられている鈴々を羨ましそうに見てる。
なぜですか、姉上。

「士官せんか？」

その言葉に、一も二もなく大賛成の鈴々と姉上。
その様子にも私も苦笑いで賛成した。

「鈴々の真名は「鈴々」なのだ！ おにいちゃん！！」

「私は、劉備玄德、桃香だよ」

「わたしは、関羽雲長、愛紗」

「わいは、横島忠夫。真名はないんや。横島とでも忠夫とでも好きに呼んでな」

「うん、おにいちゃん！」

「はい、忠夫さん」

「わかりました、忠夫殿」

こうして、私たち姉妹は、黄忠殿に仕官し、そのちからを伸ばすことになったのだった。

「うむ、愛紗よ。いい筋じゃな」

「ありがとうございます、老師」

「鈴々、もっと頭の中を空っぽにするんじゃない」

「うにゃ、考えがなさ過ぎって言われたことはあるのに、もっと考
えるなって言われたのは初めてなのだ」

老師による指南で、愛紗も鈴々も大きく力を伸ばしていた。

愛紗は考える「動」タイプで、鈴々はリミッター全開ではずして
の「動」タイプ。

自ずと指導の仕方が違うそうさだ。

さすが武神ってとこだな。

「・・・それでも、忠夫殿には当たらないのです、老師」

「鈴々も力不足を感じるのだ」

「なに、あいつにはワシですら不意打ちじゃなければ当てづらいぞ
？」

おお、と鍛錬場が盛り上がる。

一般兵も将も、武に関しては同じ地平と言うことで、合同演習し
ているため、どれだけ将が抜きんでているかを知っている兵たちは、
それでも当てられないという状況に驚いているらしい。

でもなあ・・・

「当たったら痛いやる？」

「あたりまえなのだ」

思わず笑う鈴々。

「にいさまー、そろそろお昼の時間ですよー」

「忠夫さーん、兵のみなさんの分も出来ましたー」

「おー、今いくぞー」

返事をしてから振り返る。

「おーっし、午前の武練終了！ 午後からは各隊から警備・巡視・巡回に分かれて仕事だぞお」

「「「「「了解！」「」「」「」

そんなこんなの中の日常の中やけど、世界は刻一刻と陰を広げている。歴史的に、地域治安的に判っている俺たちは、着々と準備を進めていた。

第八話

史実とは色々と違っていた。

何しろ蜀の三兄弟が三姉妹。

有名武将の大半が美女・美少女。

で、武力はスゴイ。

もちろん、老師や神族を越えるような化け物じゃないけど、一般人を遙かに越える。

そんな人間が鍛えた兵を率いて、賊を追うというのだから一方的になる。

もちろん、そのへんで慢心しがちになる兵をシメるのも将の役目なので、色々と苦心しているようだった。

ほめれば慢心するし、攻めれば萎縮する。

この辺のさじ加減がうまいのがサンバガラス。下手なのが愛紗。

とりあえず、委員長体質なので、俺の副官についてもらっている。

意外に隊を一番うまくまとめているのが鈴々。

季衣や流琉よりも纏まっているのがスゴイ。

「お兄ちゃん、ほめてほめて〜」

「「「「ほわぁ・・・癒されるう」「「「「「」

なんか向いてる方向が変じゃねえか？

「にいちゃん、ほくもほめてよー！」

「「「「許緒將軍、もえるう」「「「「」

「にいさま、試食をお願いします」

「「「「俺も食べさせてもらいてえ」「「「「「」

著しくだめな方向だな、うん。

「ただおちゃくせん、あそんでえくく」

「くくくく璃々姫様もえーーーーー!」「くくく」

てめーら、一度死地に送っちゃる。

てなことが、賊退治の寸前まで維持されるんだから、士気が高いんだかひくいんだか。

「隊長お？ ちょっとええか？」

「真桜か、なんや？」

「対攻城兵器開発予算なんやけどな・・・」

「真桜、その件はすんでおるう？」

「愛紗、昨日と今日では話が違うんや、画期的なカラクリなんや!」

「関係ない！ 民草に回さねばならぬ予算から避けるはずも無かるう!」

「城を守れば民も守れるちゆうこつちゃ!」

ぎゃんぎゃんと意見交換があるが、これは結構勉強になるらしく、俺の隣で桃香が竹織に細かな書き込みをしていた。

「んー、はじめの予算配分って大切なんだねえ」

「まあ、後からひっくり返ると困る予算は固定するけどな。せやけど、食い扶持減らしてもださならん金もあるんや」

「んー、政治つて難しいんだねえ」

「ま、政治も武術も何でもかんでも『虚実』があるもんや。砂上の楼閣のような虚でも、それが無くちゃ役に立たんし、いかに名前という虚があつても「金」つう実が無くちゃ意味がない」

「・・・きよ、極論だね、忠夫さん」

「んー、正義無き力は暴力やけど、力無き正義はゴミやからなあ」

瞬間、視線が俺に集中した。

議論も論戦もなしにだ。

「忠夫殿、それは、その、力を持って正義に当たるとの宣言ですかな？」

「た、隊長お、旗揚げ宣言？」

「そ、その、忠夫さんが立つなら、協力させてほしいかなあ・・・？」

その台詞を聞いて思わず苦笑い。

「あー、正義を語るにや、俺は汚れてるんや。せやから、周りの人たちの幸せ程度が守ればええんやけどな」

「そ、そんなことはありません、忠夫殿は民にも官吏にも愛されている、そして我ら武官の信任も厚い！」

「せやせや！ 隊長ほどうええ人が民を率いるなら、みんな安心やでえ！？」

「そつだよ、忠夫さん！ 忠夫さんなら、忠夫さんなら、優しく厳しい王様になってくれるって・・・」

ぎゅつと顔を近づけてきた三人を押し戻して深呼吸。

あー、やばかった。

潤んだ瞳と上気した顔、そして巨乳三連星、六連星ってどんだけワイの精神力を試してるんや！？ このまま暴走したるかど、本気でこれそうやったわ！

あー、ステイステイ。

「・・・あんなあ、いま、黄忠様の家臣の身でそんな怖いこと考えるかちゆうの」

「「「あ・・・」」」

思わず視線を合わせあう三人。

「とりあえずは、部屋の外で待ってる璃々ちゃんと遊ぶのが先決やな」

「「「え？」」」

振り向いた先には、戸を少しだけ開けてのぞき込む璃々ちゃん。

「忠夫ちゃん、あそんでくれるの？」

「おお、ええで」

にっこりほほえむと、うれしそうにほほえんで駆け寄る少女。高い高いをしつつ肩車。

「ほれ、お姉ちゃんたちより背が高くなった」

「わーい！ 忠夫ちゃん、背が高いからすきい！」

きゅつと俺の頭を抱きしめる璃々ちゃん。

「ね、忠夫ちゃん」

「ん？なんや？」

「忠夫ちゃんもいつかででっちゃんなの？」

「んー？ 紫苑さんに嫌われたら出てくしか無いかもしれんなあ」

「お母さんには絶対に璃々が言うから、出て行っていわれてもでてかないでね？」

「・・・うん、わかったで、璃々ちゃん」

俺が教えたゲンマンで約束。

ま、この子も眼前の三人レベルになることは決まっている「約束された勝利の胸」やし、まあええか。

巡視隊が押さえた情報で、黄巾本体が、この町をねらっていることがわかった。

一応、城があり、壁があり、それなりに栄えていて兵力が少ないという理由らしい。

「ふ、ふふふふ、我らの町をねらうだと？笑止」と愛紗。

「ははは、兵力が少ない？ 一騎当百の兵と一騎当千の将の私たちが？」 狂気の笑みの風。

委員長二人組がこの狂気なものだから、周囲は怯える怯える。

「これ」

「きゃん」「

老師の拳で我に返った二人だったが、周囲は怯えたままだった。

「で追加情報は？」

「にいちゃん、流琉が・・・」

「もどりました！」

グッドタイミング、と撫でつつ情報収集。

情報こそが戦いの本質なのですよ、ええ。

「とりあえず、いつ頃くるか、兵力はどのぐらいか、教えてちょうだい」

「はい、紫苑様」

第九話

工作隊の作業は、黄巾本体到着二日前に終わった。

というか、情報通りに罠を仕掛けたんだが、本当に上手くいくのだろうか、と疑問を会議で発言すると、忠夫殿がニヤニヤわらい。

「まあ、上手くいけば儲けもの程度に考えてりゃいい」

とはいえ、上手くいかないなんて考えていない顔だった。

「おにいちゃん、人の悪い顔をしてるのだ」

「んー、でもああ言う顔をしてるときって、忠夫さん絶対好調だよなえ」

姉上と鈴々の感想はにおいておき、会議で初めて引つ張り出された黒板（真桜発明）に、白墨（真桜発明）で罠と作戦概要がかかれ始めた。

正直、ここまで執拗にしくなくてもいいじゃないかというほど罠が仕掛けられている上に、いやらしい仕掛けでいっぱいだった。

なんとというか黄巾の奴らに同情できる様子に思える。

なにしろ、罠におびえて引き返したときに初めて発動する罠って、どんだけ意地の悪い話なんですか？

まあ、我々が武を示すよりも、民の命の方が大切であるという考えも理解できるので、それはいいのだが、どうも、こう、なんとい

うか卑怯討ちのようで、気分がよろしくない。

「まあ、城攻めで上から矢を射るのと変わらん」

老師、そのひとまとめは乱暴かと？

とはいえ、少数の不満はあるが、それなりに支持された今回の作戦は、罠に落ちた賊の処理と逃げることに成功した賊の処理に照準が合わさったといってもいい。

というか、すでに罠が上手くいくものとして動いているが、本当にいいのだろうか？

そんな風に思っていたときもありました。

騎兵の大半が落とし穴にはまったり、馬用の足取り罠にはまったり、怯えたところで弓兵のねらい打ちになったり、逃げようとした賊が転倒したところでそれが連なり、百人規模の転倒になったり、落とし穴に落ちたり。

正直に言いましょう、信じられない。

でも目の前の光景が信じざる得ないものだと言っている。

「よっしゃ、愛紗。背後部隊に襲撃命令」

「はっ！」

色狼煙（真桜発明）で合図を送ると、浅掘した待機穴から千人の歩兵が躍り出る。

鈴々、季衣、流琉の右翼と、真桜、沙和、凧の右翼。
そして、

「愛紗、正面任せる」

「お任せください！」

正面門まで降り立った私は、部隊に声をかける。

「忠夫隊、これより愚かにも我らの町を襲おうと考えた阿呆に、死の鉄槌を下す」

「「「「「おお！」

「各、思うところはあるだろう。しかし、これも我らの町を守る為の闘争。一切の妥協は必要ない！ すべてを刈り取れ！！」

「「「「「おおおおおお！！」「」「」「」「」

「隊、前進！！」

我が騎馬とともに、我らの隊は賊に襲いかかった。

「逃げる賊は卑怯ものだ切り捨てる、逃げない賊は訓練された賊だ切り捨てる、穴にはまった賊は阿呆だ切り捨てる、賊はすべて切り捨てる！！」

第十話

愛紗ちゃん、ノリノリね。

思わず城壁から弓兵を指揮しながら感心しちゃったわ。
愛紗ちゃんの部隊が通った後は、血河が出来るような勢いでものね。

戦意の引き出しも上手に行ってるから、この戦闘が終わるまで持つでしょうし、ずいぶんと助かったわ。

でも、穴にハマっただけや転んだだけの賊が回復し始めてるわね。

「つつわけで、色狼煙第二段よろしくお願いします」
「わかったわ、忠夫君」

私の指示で、火矢が城壁の先端にある火口にあたり、別の色狼煙があがった。

これにより作戦は終局に向かう。
使用が控えられていた大鉄球やらの大型武器が使用され、加速的な戦滅が起きるだろう。

そしてそれは城壁の上に招かれた領民たちに公開され、その強さを印象つける。

間者もいるだろうが、それは関係ない。
逆にこの作戦を実行し、遂行できる力があると思われた方が以後の行動を予想しやすい。

ともあれ、これ以上の作戦や検討となると一領主だけではこなすきれない。

そろそろ優秀な軍師が欲しいところね。

後に「風雲黄忠城」と呼ばれるようになる野戦鬨群の一号始動は成功に終わった。

とはいえ、最終的な武力投入がなかったことが彼らにとっての幸せだろう。

万人を越える賊軍を打ち破った町として、この町に多くの商人や人々が集まるようになりました。

兄様発案の罨作戦は、実のところ城壁以上の効果を示していて、周辺の賊がいつぺんに減ったぐらいです。

やはり皆殺しというのは大きな効果だったみたいです。

加えて、賊は肉片すら残さないという苛烈な方針で「焼き払い」、骨まで砕かれてしまいました。

これが町の犯罪者に対する方針であると認識されたせいか、破落

戸さえも滅つたんですけどね。

御爺様は「まさに一罰百戒じゃな」と仰ってましたが、一罰どころではありませんね。

でも、兄様が考えていたことはもつと別のことで、死体がそのまま土に埋まっていると陰気がたまるので、生きている人に良い影響ではないと教えてくれました。

つまり、大量の土葬はよくない、ということらしいです。

そんな考えを広めるわけでもなく、兄様は賊退治を進め、町の平和を広めて行っています。

個々の武力は無敵。

軍力の武力は無双。

百を薙払い、千を押しつぶし、万を下すと言われた風雲黄忠城。

大守に望まれた彼女の元には多くの武将がいるが、軍師の層は薄いらしい。

そこで、私たちはやってきた。

本当は曹操殿の元に、と思っていたのだが、風が強行に「黄忠」というか「罨使い」の元に行くと言いだしたため、私も興味があったので一度は見に行こうという話になった。

まず、城までに至る道で驚いたのが未だ門が遠いのに、入る人、

出てゆく人の列が長々と見えたこと。

そしてその列に加わってさらに驚いたのが、入場鑑札という制度だった。

城の中の住民以外は必ず受けることになっており、簡単な特徴と目的などを受付で控えている。

租税や賄賂などは求められず、一応、商人は別途の租税が必要になる程度の話らしい。

「稟ちゃん」

「ええ、わかってます」

この方式はすばらしい、と解ってしまった。

町に入る前からこのような興味をわきたてる政策を見せられては、風の意見が無にできない。

「大守に会えるよう、何らかの手を打ちますか？」

「そうですね、正直、見極めのために仕官するのもありだと今は思っています」

そんな私たちが入場してみたのは、文官採用募集の立て看板だった。

「これです（ですね）」

これは幸先が良い！

第十一話

隊長曰く、「優秀な文官ホイホイ」という立て看板をみてやってきた人たちの記帳をまとめて、老師の部屋に持っていったら、隊長と老師が茶を吹いて噎せつたの。

「げふげふげふげふ」

しばらく落ち着くまで待っていたのだけれど、ボソボソと老師と隊長が内緒話。

「……程立に郭嘉、楽進・李典・于禁、典韋・許緒……」
「……曹操涙目じゃな」

程立と郭嘉は、たしか今日の文官入試に名前があったの。

「それにしても、諸葛亮と鳳統とは……」
「集まりすぎつすね」

「隊長、なにか間違っていたの〜?」
「いやいやいやいや」

なぜか老師と隊長はあせつたように首をヨコに振る。
とつてもあせつてるの。
これは何か秘密があるの。

この秘密を白日の下にさらせば、何か言い事があるに違いないの!

「おしえるの……!……!……!」

「だー! おっぱい押し付けるなあ!」

「教えるならやめるのお!!」

「くう、離されんと地獄が待ってるはずなのに、この魅力には逆らえん!!」

「ふっふっふ、隊長、観念するのなの!」

さすが天下の女好き、真桜に及ばないこの胸でも誘惑可能とは、隊長は恐ろしい人なの!

なんつつか、有名武将とか軍師が山ほどやってくる黄忠城です。

三国志知識があると、気でも違うんじゃないかと思わされてしま

う。
これだけの人間を抱えてると、人件費だけでもすごいことになりそうなもんだけど、チート軍師たちがホイホイ片づけてしまうせいで、信じられないほど低い税率+高効率の運用が出来ている。

「忠夫様、お話を聞かせてくださいませ・・・ってかんじだった」

「わ、わ、わたしゆも・・・!! ってかみまくり」

「お兄さん、風にも聞かせてほしいのですよ」

と、ロリ軍師隊が、なぜか政務の合間に集まって、いろいろと話を

をする機会が多い。
これに季衣やら流琉、鈴々も加わると盛り上がり、璃々ちゃんも加わると大家族になってしまう。

・・・つつかよお、なんで顔もスタイルも

抜群のお姉さん方が多いのに、俺の周りにロリしか来んのかねえ？
俺の膝の上を順番で占領するって、なんのルールですかぁー？

まあいいけど。

「隊長、そろそろ巡視の時間なの〜！」

「お、了解〜」

そんなわけで、そろそろ解散。

「くくくくぶ〜〜」

不満そうなロリッコたちを、一人一人引きはがしているところであることに気づいた。

一人多くね？

「あ、鈴々が拾ってきたのだ！」

パンダのアクセサリー付きの帽子をかぶった少女が、ガツガツとお茶受けを踊りぐい。

その隣でピレネーっぽい大きな犬も一緒に食べてる。

「おー、そうかそうか、鈴々偉かったな」

「お兄ちゃん、これも将のお役目なのだ」

にっこり微笑む鈴々を撫でつつ、少女の目線に合わせてしゃがんだ。

「おなか減ってるのか？」

こくこくとうなずく少女と犬。

「よし、巡視は誰かに変わってくれ、沙和！」

「もう、隊長」

「今度おごるから、な？」

「・・・む、了解なの」

というわけで、なぜかロリッ子軍団がそのまま食堂まで移動してきた。

むー、鈴々と季衣が来るってことは、そのまま知らない女を単純に餌付けするわけじゃないよな？ 私らにも食わすよな？ という圧力かいな。

横島さんが、また幼女を囲ってる。

そんな噂を聞いて厨房にきてみれば、城内の小柄女子が全員集まっているかの様子だった。

もしかして、幼女踊り喰い？

「り、鈴々ちゃん。これ、何の集まり？」

「桃香ねえちゃん、おにいちゃんがごちそうしてくれるのだ！」
「？」

詳しく聞くと、行き倒れの女の子を鈴々ちゃんが拾ってきたので、忠夫さんがその世話をしているという話だった。

そういえば、鈴々ちゃんを拾ったのも横島さんだって聞いたっけ。そのあとで、私たちも拾ってくれたんだけど。

「……ぶはあ！ とってもおいしかったですぞ！！」「わふわふ
！」

熊猫の飾りをつけた帽子をかぶった女の子が、輝く笑顔で横島さんにお礼をする。

「なになに、ええって。おなか空いてたら良いことないしな」

優しくなでられた女の子と大きな犬は、とても気持ちよさそうにしている。

「あ、あの、私に恩返しをさせてほしいのです！」「わふわふ！」

ふつうだったらここで断る横島さん。

でも、女の子の名前を聞いた途端、両膝をついてしまいました。

「……なにか変な名前でしたか？」

「い、いや、かわいい名前だと思うぜ、陳宮ちゃん」

「……ねねね、いえ、ねねと呼んでほしいのです」

いきなり真名交換です!!

やっぱり横島さんは幼女ねらいの幼女狩り人?

「聞こえの悪いこと言うなや!!」

「「「「ええええええええ?」」」」

「おまえらものっかるなや!!」

第十二話（前書き）

・・・なんか、書けましたw

今回は紫苑視点中心です

第十二話

忠夫君が雇い入れることを進言してきた女の子、陳宮ちゃんはかなり優秀な女の子だった。

朱里ちゃんも雛里ちゃんも太鼓判を押す形で軍師、事務方として雇い入れることになった。

ほんとうに忠夫君達がきてから、私の領地は信じられないほど発展しているのに、役人の腐敗は殆どみられなかった。

これは今までもそうだったのだけれども、それ以上に軍師のみんが頑張ってくれているからだということとは理解している。

そのうえ、この城の代名詞となっている「畏群」は忠夫君特製のもので、彼なしでは語れない。

先日もその「畏」について勉強させてほしいと言ってきた女の子がいたぐらいだ。

曰く、「あれほど芸術的な畏穴はない」と熱心な感じだったけど、制作者の忠夫君を紹介したら手のひらを返したように罵倒しはじめ、その場から去ってしまった。

ひどく無礼な行いに私は憤慨したのだけれども、忠夫君は苦笑いだった。

「あの娘はたぶん、男が嫌いなんすよ」

「それでも、最低限の礼儀があるわ」

「それを越えるほど嫌いなんすから、たぶん暴力をふるわれたんじゃないっすか？」

すつと胸に落ちる感覚があった。

なるほど、と思わされる。

「さすが貧乳狩り人ね」

「わいは、おっぱいの大きいお姉さんタイプがこのみじゃ!」

「あら、じゃあ、私は?」

「もろ好みのご真ん中です!」

まあ、うれしいことを。

ちよと誘惑しちゃうかしら?

「ちら?」

「ぬををををを!! こ、こ、こここで負けてしまったら、わいは、わいは、あかん兄ちゃんになってまう。せやけど、この誘惑は誘惑はあああ!!!」

あら、血の涙を流すぐらいだったら、我慢しなくてもいいのに……。

「もひとつ、ちら」

「もうしんぼうたまるんですたい! ……ぶげらっ!」

あら、いつの間にか時間切れみたいね。

「忠夫殿!! そのような情弱な感情に負けているのは訓練がたりんからです!! これから試合ますよ!!」

「ま、まっつてくれ愛紗!」

「まちませんよ、忠夫さん」

「な、桃香までえ!」

あー、愛紗ちゃんと桃香ちゃんにもっていかれちゃった。

なんて事があったのに、いまじゃ幼女狩り人なんて言われてる。もう、今度夜に忍び込もうかしら？
璃々もお父さんが忠夫君ならうれしいだろうし。
そうね、善は急げね

えーっと、どう言えばいいのかしら？

忠夫君の部屋に忍び込んでみると、なぜか山盛りの幼女。
というか、我が娘璃々を筆頭に幼い系の女の子が忠夫君の寢床に
集まって、山盛りで寝てるわね。
そのせいか、部屋の中が暑いぐらい。

小さな子の体温は高いから・・・。

でも、毎晩なのかしら？

「毎晩なんすよ」
「！」

思わず驚いたけど、どうにか声を出さないでいられた。

「紫苑さん、璃々ちゃんのお迎えですか？」

背後から現れたのは忠夫君。

でも寢床の忠夫君も、ちゃんとした気配がある。

「あ、ああ、これは真桜が作ってくれた『抱き枕よこっち一号』っす」

「よ、よくできてるわねえ・・・」

「気味悪いほどそっくりっすよ」

そついいながら、部屋の外に私を誘導した忠夫君。

「一応、璃々ちゃんも寝入ってるんで、このまま寝かせてあげてください」

「そつね、璃々も忠夫君が大好きみたいだから」

月明かりの東屋まで来たところで、忠夫君はどこからか器と酒瓶を出す。

「寢酒にってもってきたんすけど、飲みませんか？」

「いいわね」

ちよつと勢いはなくなっただけど、印象的な夜にできそう。

「あ、そつだ、忠夫君」

「なんすか？」

「寢床は占領されちゃってるから、私のところで一緒に寝る？」

「ぶばーーーーー！！！！」

あら、きれいな赤い液体を噴出して、忠夫君がゆっくり倒れていくわ。

ふふふ、このままお持ち帰りね。

「紫苑様、一応、それ、お持ち帰り禁止や」

「紫苑様、隊長は渡さないの」

「隊長には、せめて自分の意志で選んでほしいです」

あら、真桜ちゃんに沙和ちゃんに凧ちゃん。
みてた？

「「「みてました」「」」

まあ、今回はあきらめるけど、次は食べちゃっわよっ。

「「「だめ……！……」」」

第十二話（後書き）

設定や歴史背景は細かく描写していません。

というか、その辺の説明回はそろそろ入れることになるとは思いますが、設定資料みたいな感じになるので、面白みがないかもしれませんw

次回更新 2011/12/31 AM02:00

第十三話（前書き）

さて、のんびりしていた神代系外史にも戦乱の波は訪れます。

第十三話

やばかった、昨晩はマジでやばかった。

紫苑さんやつたら、食われて本望やけど、なんかその先がやばい予感バリバリや。

そう、あれや、小鳩ちゃんのとくときと同じや。

いかざるえん罷なのに、その先にあるおいしい餌がやばすぎる、そんな情景。

このまま城にいとガリガリいろんなもんが削られそうや、そんな風に思っているところで、都からの使者がきた。

『領外で暴れている黄巾なる胡乱な輩を討伐せよ。なお、官軍は都を防衛するため、一兵たりとも出兵せず』

良い根性やなあ、マジで。

本気で感心した俺だったけど、愛紗や凧なんかの委員長組は本気で怒っていた。

もちろん、使者なんて手紙と一緒になんだから怒っても仕方ないんだけどな。

「ですが、隊長……!」

「あんな、都から官軍をうごかせんつうことは、都はそれだけ内紛しとるんや。政治で民がこまっとるのに、うちは領内だけでいいんか?」

「……考えが浅かったことをお詫びします」

さすが委員長体質、まじめやなあ。

紫苑様の指揮下で分隊が組織されました。

領内警備は愛紗さんが筆頭となり、私と楽進隊が周辺警備を行う。加えて、老師が居ていただけるといふ事なので、実に安心感がある。

というか、老師が城下でふらふらしているだけで犯罪件数が皆無になる。

それも、領内近隣まで「老師が今日は外を出てる」といふ話が流れるだけで、静かになるのだから、都が頼ってくるのは当然かもしれない。

そう、老師は、一度外を巡回する、となると、本当に町だけではなく周辺各町村までふらふらと出歩き、ザクザクと不心得者を狩り立てて帰ってくるのだ。

やりやすいことこの上ない。

あとは愛紗さんの関羽隊で周辺警戒することになる。

では、黄巾討伐部隊は？

筆頭の第一部隊はもちろん、横島隊長。

軍師に稟さん、ねねさん。

戦闘部隊に鈴々さん、季衣さん、流琉さん。

主に正面打撃と撃破を目的とした編成だ。

そして第二部隊に桃香様。

軍師に朱里ちゃん、雛里ちゃん。

戦闘部隊に沙和、真桜。

こちらの部隊は主に支援と軍略が主な役目になり、襲撃された村や町の復旧も行う。

で、情報操作に風さまが一部隊を引き連れて遊撃する事になっている。

規模は小さいけれど、黄忠城そのままが外に出た形といえるだろう。

「風、ではゆくぞ」

「はい、老師」

なんとというか、この小さな背中が何十倍にも見える。

武の極みとは、かくも遠く果てしないのか。

領外に出て、足場となる村を保護。

糧食で村人を生かし、そして部隊展開を行う。

忠夫様から聞いたとき、自由性が少ないのではないかと思いましたが、運用は実に上手くいっています。

桃香様が先頭に立ち、村人や旅人を保護しているのですが、彼女の持つ雰囲気のおかげで安心感を得ているようでした。

「いんやー、領主さまは良い人材をお持ちだあ」

「もう、おだてても割り当ては増えませんか？」

と、分隊の将が率先して炊き出しをしているのだから威嚇がない。でも、それ以上に黄忠様の治世を表す空気だとも言えることだった。

このゆるんだ空気を食い物にしようとする勢力は幾つもあるのだけれども、食いつく寸前で足踏みしてしまおうそうだ。

老師や忠夫様の即応部隊の存在や、地域巡回の際に外にまで出向く愛紗さんの存在もあるのですが、随所に施されている「罨」の存在が、一罰百戒七転八倒の異名を得つつある黄忠城の名を思い起こさせるから、だとか。

本当に、あの戦いの記録をみると、あまりの事に背筋が寒くなります。

あの戦いの場に私が居たら、冷静に指揮ができたでしょうか？

「朱里ちゃん、どうしたの？」

「……ちよっと、考えごとです。桃香しゃま……って、またかんじゃない？」

あーん、すごく格好良い感じで考え事してたのにい〜。

もー、桃香さまのばかー。

なんやろ、紫苑さん、わいに恨みがあるんやろか？

自分の第一部隊の編成。

稟はいい。妙齡でナイスバディーだ。

でもな、あとの将は、ねね、鈴々、季衣、流琉って、ロリ組やん
！！

なんなんや、紫苑さんはわいをオトしたいんか？ 暗黒面にオト
したいんか？

くう・・・泣ける。

「忠夫様、どうかしましたか？」

さすがに稟のナイスバディーで脳味噌リセットしてましたとは言
えなかったので、沈痛にうなずいて見せた。

それだけで、自分内見解を組み立てた稟は重々しくうなずく。

「酷いものですね」

「ああ、ひどいな」

目の前に広がる廃墟。

引き裂かれた遺骸。

砕かれた生活。

「・・・ねねは、ねねのむらは、もう少し酷かったです」

ねねもまた戦災孤児。

しかし、彼女には才があり、生き延びただけにすぎない。

俺は隣にたつねねの頭をなでる。

「みんな、この光景を目に焼き付けてくれ。これが、このバカな光
景が俺たちの古里をおそっている現実だ」

部隊全体が沈黙のまま見つめる。

「これから先、何度もこんな光景を見るだろう。でも、絶対に慣れないでくれ。この光景は絶対に否定しなけりゃならない光景なんだから」

強い同意の波動を感じる。

意識が一つの形に固まった瞬間だろう。

「忠夫様、風さまより伝令が参りました」

「通してくれ。あと、伝馬の換えを。折り返し伝令を戻すから選出も」

「了解」

受け取ったそれを広げ、読み下す。

漢文は妙神山合宿で優先的にたたき込まれたもので、わりと自由だ。

「稟、ねね、みてくれ」

二人は受け取ると大きくうなずいた。

「本来は拙速とは避けるものですが、速度こそ命ですな」

「はい、そのとおりですね」

俺は周囲を見回す。

空気が変わったのを感じ取ったのか、部隊は張りつめていた。

「いま、先遣部隊からの報告がはいった。この先の村が、この村を

襲ったバカどもが、再びバカを犯そうとしている」

膨れ上がる空気。

それは、怒り。

「俺たちがなすことは一つ。この先、同じこの光景が生まれぬようにすること！」

応！ と短く気合いの入った男女の言葉。

「部隊全力前進に向け準備。軍師、冷静に冷徹にバカをたたき伏せる策を」

俺の言葉に二人は「了解」と返事した。

「にいちちゃん、許緒隊を先行させて！ 壁になるから！！」

「兄様、典韋隊こそ先行させてくださいませ！」

「お兄ちゃん！張飛隊こそ先行にふさわしいのだ！！」

やる気に逸る三人の頭を順番になでる。

「策は稟とねねが立てる。拙速こそ求められるとは言え、ほんとうに拙速では兵が無駄に死ぬ。彼らは、彼らには、絶対無駄死にしてほしくないんや」

三人はゆっくりりと、本当にゆっくりりと、視線の中に宿した「殺氣」を納めてゆく。

「かわいい美少女が殺氣立ってたらもつたいないで？」

第十三話（後書き）

戦乱の浪を利用して、ロリ地獄から逃げようとしたのに逃げ切れなかった、の巻でございますw

というわけで、今年の更新はここまで、といっても、明日も更新しますがw

次回更新 2012/01/01 AM02:00

第十四話（前書き）

あけましておめでとございます。
今年もよろしくお願いいたします

で、ちょっと、よこつちとは思えない発言が続きます。

第十四話

さすがに無謀でしたねえ〜・・・。

万に達する黄巾に対して、我方は数千。

しかも、村にはこれといった防衛拠点はなし。

たしかに、わが紫苑兵は一騎当千とはいいませんが当百に届くほどの武を備えています。さすがに、本当に百を一度に落とすことなど出来るはずありません。

とはいえ、お兄さんに開戦前の段階で早馬を出していますから、そろそろ返事が・・・

「風さま、伝令が戻って参りました」

差し出されたそれは、風が送った書状。

その裏面に書くというのとはどうかと思いますが、新しく用意して楽観を押しなどという時間は無駄なので、正しい判断なのです。

「・・・さすが稟ちゃんとなねちゃんなのです〜」

思わずニヤリと笑ってしまった。

「野郎ども、二刻もたせるだけで、増援到来だ！ 盾になるだけなら村人でも戸板で出きんだろ！？ 命を張れ、この村と自分の未来を守るのは、おめーら自身だぜ！〜！」

「これこれ、ホウ。風ですらそんな長台詞は無かったのですよ？」

瞬間、どつと笑いが周囲に広がる。
うん、この空気、勝てる。

さあ、お兄さん。

風達が蹂躪される前にたどり着いてくださいな。

わたしとねねが考えた策に一部修正が加えられて実行が行われた。
後詰めの第二部隊からも即応で沙和隊が追いついてきているはず
だった。

予定では二刻ほどかかるはずの距離を、一刻で走り抜けた忠夫隊
と張飛隊が、作戦の一陣に当たる。

「銅鑼をならせ！ われら一罰百戒の使者なり！！」

「烏合の賊など槍のヒト払いだ！！」

「いや、我が剣の錆だ！！」

忠夫隊の武器に縛りはない。

各々の特性にあった武器が支給され、鍛錬している。

先頭を突き進む忠夫様は、鎧などをまとわぬはずなのに、矢の一
つもあたりはしない。

「我らの隊長を守れ！」

「女湯覗きの勇者とともに！！」

「おめーら、よけいな事言うなや！！」

・・・緊張感のかけらもありませんね。

「稟ねえちゃん、キツツキ、いくのだ」

「頃合いですね」

忠夫隊から一拍遅れて張飛隊が前進。

乱戦気味の忠夫隊が引くにあわせて長槍の張飛隊が前にでる。

忠夫隊を追って前にでた賊を、長槍の針の山が切りさく。

勢いが止まり、前にでる勢と下がりたい勢が固まったところで、追いついてきた許緒隊、典韋隊が襲いかかる。

あとはこの行為を数力所で行うだけでよい。

ここで壊走に向かわせるのが、私たちの案でしたが、忠夫様の案が違いました。

余りに絶望的な劣勢に心がおれるか、黄巾のこの集団をまとめる誰かが鞭を打つはずだ、ということです。

そこをねらう、それが忠夫様の修正案だった。

まとめる人間がいれば忠夫案、まとめる人間が居なければ私たちの案となります。

さあ、まとめる人間がいれば、それを捕れ、さらには黄巾の弱体化に繋がるでしょう。

居なくても、これだけの被害を受ければ壊走は間違いありません。

「忠夫隊、もうヒト当ていくぞ！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

おや、移動すると思っていた忠夫様がもうヒト当て？

「稟、出てきたで。『鞭振り』や！」

「了解です、忠夫隊に沙和隊を浸透させます！」

きましたか！

ならば、全滅です！！

「風様からの狼煙も上がりました！」

「おう、なら、いくで！！」

掲げられたのは、忠夫様の輝く剣。

そう、腕から直接伸びた光輝く「光の剣」。

「きけ、俺らの敵は目の前だ！ 今から作戦もなにもない、鬼にあつては鬼を切り、餓鬼にあつては餓鬼を切る、そんな地獄を作り出す戦いだ。けどな、俺らの背中の後ろには、俺らが守りたい日常が、平和があるんや！！ すべても守るため……」

一度、息を吸った忠夫様。

「兵、前進！」

「『『『『『『『『『『『」

「将、前進！」

「『『『『『『『『『『」

「全軍前進、すべてをたたき伏せろ！！」

「『『『『『『『『『『」

鼓舞された紫苑軍全体が進む。

蹂躪だといつてもそれは無頼な行動ではない。

整えられた武力と向けられた軍意が、賊に収束しただけだった。

「手綱はまかせたで、稟、ねね」

「お任せください」

「お任せなのでござ！」

それは目を疑う光景だった。

少数からなる精鋭が、賊軍をけちらして行く。

領内にはびこる黄賊を退治するように都から指示が下ったが、早々に対応できるはずもない。

が、勅命だ。

従うほかない。

烏丸対策もそこそこに、従姉妹たちへ城内周辺を任せ、私は領地外苑巡回していたのだが、どうにもこうにも出来ないほどの賊の数に、ウンザリとしていた。

客将趙子龍も齒ごたえのない、それでいて数だけばかりの賊軍にウンザリとしている様子だった。

このままだと、あいつ、抜けるんだろうなあ。

あいつが抜けると、軍がガタガタだな。

そんな思いが視線に出てしまったのか、趙子龍に苦笑いをさせられました。

いつもならば私で遊ぶ場面だろうが、その苦笑いは「バレましたか」と言っただころだろう。

「伯珪様、前方で賊軍との戦が行われています」

「どこの軍だ？」

少なくとも都の官軍ではない。

「牙門旗は、『横』『陳』等、多数！」

「ほお、噂の黄忠城の連中ですな」

「・・・あの、武神の、か？」

一人の老人が、千を越える賊を抱えた砦を砦ごと潰したという、嘘とも本当とも思えない噂。

その弟子たちが軍をまとめ、そして奸智に長けた弟子が城の守りを高めたという。

・・・うちにも一人ぐらいこないかなあ。

いかんいかん。

「全軍展開、賊軍が流れてきたら潰すぞ」

「御意！」

面白くなったという顔の趙子龍。

あーあ、この将も残ってくれないかぁ・・・。

まあ、あたしが将だったら、あっちの方が面白そうだもんなぁ。

あ、そうか、同盟を結ぶか？

向こうの利があるかどうかわからんけど、打診ぐらいしておくか。
うん、いい思いつきだな。

そんなことを考えながら前進すると、その光景が目に入った。

少数なる精鋭が、大規模な黄賊を蹂躪するという有様が。

「伯珪殿、これは参戦すべきですか？」

私にも槍を振らせろ、と視線が語る。

それは理解できるのだが、この戦場に無作為な一撃は難しい。

「どう言っことですか？」

私が答えようとしたところで、声がかけられた。

「それは、風が説明するのです」

怪しげな人形を頭に乘せた少女が現れた途端、趙子龍は相好を崩す。

「おお、風ではないか」

「星ちゃん、ひさしぶりです」

聞けば、趙子龍がうちにくる前に、一緒に旅をしていたという。で、彼女は黄忠城に仕官していて、いま、行われている作戦の一端を担いでいるそうだ。

キツツキと呼ばれる長槍を主軸にした誘い出しと総攻撃の繰り返しは、かなり合わせが難しく、実働するかわからない話であったが、目の前で出来ているのを見ると、我が目を疑う。

「つまり、今は、個々の武ではなく、賊を翻弄できる早さと正確さが必要、そういうことだな？」

「その通りです」

恐ろしいまでの精密さだった。

「で、風。その将を紹介してくれるのあろうな？」

「いいですけど、一応、今も見えますよ」

彼女の指す先には、光る何かを掲げた男が先頭を切つて賊軍に切り込み、しばらくしては引くということを繰り返していた。

「ふむ、彼の者が『横』、横島殿ですか」

「はいなのです。武神の一番弟子にして、風の大好きなおにいさんなのです」

なんだかずいぶんと気軽な感じだな。

というか、殺伐とした戦場の片隅で、大好きとか言われてもなあ。

第十四話（後書き）

というわけで、GS恋姫無双でした。

人を殺すというシーンは避けられませんが、できるだけやんわりと表現しています。

とはいえ、戦いの後のシーンは色々に入れる予定です。

次回更新 2012/01/02 AM02:00

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8498z/>

GS 恋姫無双

2012年1月1日02時06分発行